



Title	赤穂緞通の文様研究 : 文様の独自性形成過程と犬と松のイコノロジー
Author(s)	高嶋, 忍
Citation	デザイン理論. 2014, 64, p. 37-50
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/56383">https://doi.org/10.18910/56383</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

# 赤穂緞通の文様研究 — 文様の独自性形成過程と犬と松のイコノロジー —

高 嶋 忍

キーワード <sup>いぬりけん</sup>  
赤穂緞通, 犬利剣文様, イコノロジー  
Akô *dantsû* (rugs), dogs and sharp swords pattern,  
Iconology

序

1. 赤穂緞通と文様
  2. 大正から昭和初期における赤穂緞通業の隆盛
  3. 「赤穂の物語」の表象 — 犬と松のモチーフ —
- 結 論

## 序

赤穂緞通とは、明治期に兵庫県播州赤穂地方で生まれた産業の一つである。中国産や日本産の絨毯を緞通と呼ぶが、これは中国語の毯子<sup>タンツ</sup>(t'an tzu)が語源とされている。国産の緞通は、主に木綿を素材とする絨毯で、日本家屋に適した畳1畳分を標準サイズとする<sup>1</sup>。

これまでの赤穂緞通の研究は、製作背景や技術、その歴史に関するものが中心であった。文様に関する先行研究は、佐賀県立美術館と赤穂市立美術工芸館田淵記念館で行われた研究調査以外ほとんどない状態である。

本稿では、赤穂緞通で文様の独自性が形成された過程を明らかにする。特に赤穂のオリジナルと特定され、大正から昭和初期に生まれた「犬利剣文様」に着目し、この文様が有する意味をイコノロジーによって読み解き、文様が生まれた社会的背景とともに考察する。赤穂緞通の特定の文様に着目し、その解釈を試みた初めての研究であり、また文様を土地の歴史との関わりから論じた点に意義を見出すことができる。

## 1. 赤穂緞通と文様

### 1-1. 国内における緞通産業

絨毯などの敷物類は、中央アジアから西アジアを起源とし、日本には中国大陸を経由してもたらされた。舶来品の敷物は、織物のほかに毛氈などもあり、時の朝廷や幕府の権力者への献

本稿は第55回大会（2013年7月20日、於：福井工業大学）での発表に基づく。

上品として用いられた。

日本の緞通は、中国の制作技術に基づき、元禄期に佐賀県鍋島藩から始まった。当時の鍋島緞通は藩の御用品として将軍家等へ献上されたため、格式ある敷物として評価が定着した<sup>2</sup>。明治以降、大阪の堺や兵庫の赤穂でも生産され、一般にも出回るようになる。この鍋島と堺と赤穂は「日本三緞通」と呼ばれ、近代まで産業として存続した<sup>3</sup>。

民間で生産が始まった明治以後、緞通は重要輸出品として殖産興業策の対象になり、内国勸業博覧会や共進会等にも出品された。ちょうど日本政府は海外の万国博覧会において工芸品が新しい産業になることを発見し、製品の海外輸出を本格化していた時期である<sup>4</sup>。また政府主導による工芸品全般の意匠改良が始まり<sup>5</sup>、緞通の場合も、世界の絨毯産業に新規参入するため意匠改良が必要だと認識された<sup>6</sup>。しかし1877（明治10）年の第1回内国勸業博覧会以降、主に原材料が注目され、製造費の安い堺緞通が欧米の低所得層むけの輸出品に相当だと評価された<sup>7</sup>。

これより堺緞通は、特に輸出品として大量生産され、明治20年代には年間生産高90万畳に及ぶ最盛期を迎えた<sup>8</sup>が、中国緞通との輸出競争に敗れて大正期以降に衰退した<sup>9</sup>。

一方の赤穂緞通と鍋島緞通は、ともに国内中心に流通し、第二次世界大戦後に衰退する。赤穂緞通は、児嶋なかによって1874（明治7）年に始まり、特に塩業地帯だった赤穂では、明治20年頃から塩田で働く女性の副業として発展した<sup>10</sup>。しかし第二次世界大戦の影響により、1937（昭和12）年の綿花輸入制限などの経済統制を受け<sup>11</sup>、赤穂の緞通業は一度中断する。戦後の1951（昭和26）年に1軒の工場が操業を再開したが、高度経済成長に対応できず、1968（昭和43）年に川島織物株式会社傘下に入ったのち、後継者不足から1991年に閉鎖した<sup>12</sup>。現在、赤穂緞通技法は市の無形文化財に指定（1984年）<sup>13</sup>され、1999年から市民による技術の伝承活動が行われている<sup>14</sup>。

国内における受容をみると、鍋島緞通と赤穂緞通の価値は、明治以降に家柄や富を示すステータスシンボルとして確立した。緞通は普段蔵などに収納され、茶席や結婚式、正月、祇園祭（京都）の屏風祭など、はれの日にだけ出して使用された。また部屋に敷きつめて用いることもあり、所有者は同じ文様を複数枚所持していることが多い<sup>15</sup>。

当時の年間生産高を比較すると、赤穂緞通は1898年に推定5,100枚／年、鍋島緞通は1906年に300枚／年、1935年に360枚／年と記録されている<sup>16</sup>。つまり、明治から昭和にかけて国内で流通していた緞通は、圧倒的に赤穂緞通が多かったのである。

しかし現在、京都で緞通を所持する家では、赤穂緞通を鍋島緞通と認識している傾向がある。これは、鍋島緞通が江戸時代に将軍家への献上品であったことから知名度が高く、すでに確固たるブランドを確立しており、仲買店の中には鍋島緞通の商標で赤穂緞通を販売することが

あったためである<sup>17</sup>。

このように初期の赤穂緞通は鍋島の代替品として普及するため、当初は鍋島緞通や中国緞通の意匠を模倣していた。もっとも当時は意匠権が確立していなかったため、相互に文様の影響を受けている。鍋島緞通に関しては、赤穂緞通が京都で人気となって以来、その豊富なデザインに影響を受け、明治30年頃から赤穂の文様・糸・織り方を取り入れるようになった<sup>18</sup>。

### 1-2. 緞通の文様構成 — 利剣文様を例に —

緞通の文様の基本的構成は、中心となる主文と周囲を囲む縁文である(図1)<sup>19</sup>。例えば主文に「剣のような文様」(図2)を入れた場合、緞通のデザインとしては「利剣」文様(図3)と呼ばれる<sup>20</sup>。また赤穂緞通では、図2の破線部分に「犬と松」の文様(図4)をいれたデザインを「犬利剣」文様(図5)と呼び、利剣文様の一種とみなしている<sup>21</sup>。

利剣文様は、赤穂緞通の古典的な文様のひとつとされ、明治時代から昭和30年代まで盛んに織られた。この文様は、かつて織子の間で「忠臣蔵」と呼ばれ、年末が近づくと注文が増えたという<sup>22</sup>。利剣文様の一種である「犬利剣」文様は、古い時代のものは未発見で、昭和初期によく注文されたが戦後は生産されなかったことが判明している<sup>23</sup>。

「犬と松」の文様は木の下に動物のいる配置で、いわゆるササン朝ペルシャの樹下動物文様(図6)の構図を借りたものと考えられている<sup>24</sup>。同文様は、赤穂緞通の別のデザイン(図7)にも組み合わせられている。ただし、鍋島や堺で同文様が組み合わせられた例は発見されていないことから赤穂独自の文様と特定できる。

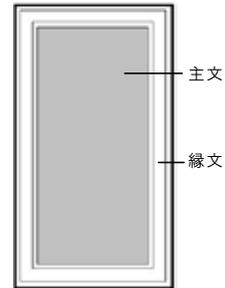


図1. 緞通の文様構成



図2. 「剣のような文様」



図3. 利剣文様



図4. 「犬と松」文様



図5. 犬利剣文様



図6. 樹下動物文様



図7. 「土耳其」文様

### 1-3. 赤穂緞通の文様

これまでの赤穂緞通の文様研究は、主文と縁文の組み合わせによる違いや、文様形式のみの分類しかなされていなかった。本稿では、鍋島と堺との比較や文様の通時的な変化に注目した区分によって分析し、赤穂で文様の独自性が形成された経緯を考察する。なお現在までに発見されている赤穂緞通については、図録<sup>25</sup>に収録されたものを対象とし、また赤穂市立美術工芸館田淵記念館においては所蔵品の調査を行った。

赤穂緞通のデザインをみると、明治初期に緞通において古典とされた文様は大きく3つに分けられる。ひとつは鍋島緞通の模倣である蟹牡丹文様、二つ目は、赤穂の代表といえる利剣文様、三つ目は中国伝来ものの模倣である。

明治中期以降になると多様な文様が生み出されていく。明治20年頃に赤穂緞通業の基礎を築いた早川緞通工場では、京阪地方より技師・画工を招き、意匠の改良をすすめた<sup>26</sup>。早川緞通工場は、1888（明治21）年の「兵庫県品評会」に藤製緞通を出品して1等賞を受賞、また1890（明治23）年の内国勸業博覧会に「藤皮製段通〔原文ママ〕」を出品したことが記録に残っている<sup>27</sup>。赤穂緞通全体では、蟹牡丹文様と利剣文様にもバリエーションが増えたほか、着物に使用されていた文様を用いるなど、これまでの緞通にはない多様なデザインが生み出された。

大正中頃から赤穂独自の文様を作り出す動きが顕著になる。この時期以降、顧客用カタログが発行され、「丸牡丹」「利剣」「土耳其」<sup>28</sup>など赤穂独自のデザインが確立した。さらに昭和初期には、洋画家をデザイン顧問に起用したり、赤穂鉄道株式会社とタイアップしたりと、赤穂の独自性を前面に出そうとする様子がうかがえる。同時期に、「利剣」と「土耳其」の2つのデザインに「犬と松」の文様が組み込まれた。つまり当時の赤穂緞通業は、染織品に用いられる既存の文様を利用するだけでなく、デザイン研究そのものに熱心に取り組んでいたのである。

しかし先述の通り、第二次世界大戦の影響ですべての緞通工場が閉鎖したため、このような新しい試みは中断する。敗戦後に再開した工場では、新しい文様を考案せず、大正中頃から昭和初期に確立したと考えられるデザインの中から、「利剣」「亀甲」「福寿」「雲竜」「蟹牡丹」「土耳其」「牡丹」という7つのみを織った<sup>29</sup>。

以上から、大正から昭和初期という短い期間に、顧客用カタログの発行やデザイナーの起用など、多様な商業戦略が図られ、赤穂緞通の文様の独自性が確立したことが明らかになる。

## 2. 大正から昭和初期における赤穂緞通業の隆盛

大正から昭和初期にかけて、赤穂緞通業は製品のデザインを重視するという近代的な発想を持ち、地場産業として栄えた。2章では、赤穂緞通業の隆盛の背景について、販売促進活動、

マスメディア、交通網の整備などを論じる。また利剣文様の通称になった「忠臣蔵」に着目し、緞通業と赤穂の町と「忠臣蔵」の関係を観光という視点から考察する。

## 2-1. 赤穂緞通業の販売促進活動

大正から昭和初期、赤穂緞通業全体は、商品価値を高めて販売を促進するために「皇室御用達」という文言を利用した。例えば赤穂緞通製作所が発行した顧客用カタログでは、「宮廷の御用命を拝受する事数度に及」ぶことを宣伝した。さらに「御用製作品表」欄で1898（明治31）年から1931（昭和6）年までに皇室等へ納入した赤穂緞通の一覧を掲載している<sup>30</sup>。

また販売促進の一環として、赤穂緞通業は緞通の文様名においても皇室との関わりをアピールしている。図8のデザインは、主文が「唐花に蔓草文」で縁文が「波文」であるが、貴人を意味する「御寮」と名付けられた。「御寮」は人気があり、1938（昭和13）年頃まで複数の織元で織られた<sup>31</sup>。赤穂緞通業では、明治から昭和にかけて、<sup>おめし</sup>御召列車の敷物などとして皇室に御用品を納めている。1898年に製造された初代3号御料車の内装（図9）をみると、



図8. 「御寮」



図9. 初代3号御料車内部

御座所（天皇の御座席のある部屋）の絨毯には「縁周りに波形、中央に花葉文様が描かれて」<sup>32</sup>いる。これが「御寮」とされる赤穂緞通だと考えられる。したがって、もともと御用品として作られたことを示すため、主文や縁文とは関係のない「御寮」という文様名が付けられたことがわかる。

このように、赤穂緞通業では販売促進活動として「皇室御用達」を謳い文句にし、鍋島緞通の商標に頼らずに商品価値を高めようとしていたのである。

## 2-2. 「忠臣蔵」の大衆化

利剣文様と「犬利剣」文様は「忠臣蔵」という通称だった。「忠臣蔵」とは『仮名手本忠臣蔵』の略称で、史実の赤穂事件を元にした物語である。赤穂事件そのものより、江戸時代に浄瑠璃や歌舞伎として取り上げられたことが、後の社会に大きな影響を及ぼしている。

当時、庶民の娯楽作品だった「忠臣蔵」は全国でどのように認知されていたのだろうか。近代において「忠臣蔵」という物語が全国に受容されていく過程を、宮澤誠一と松島栄一が詳述しているが、その過程には2つの「忠臣蔵ブーム」が存在した<sup>33</sup>。

宮澤（2001）によると、日露戦争後の国家主義思潮の高揚を背景に、第1次忠臣蔵ブーム

が起こる。きっかけの一つは、浪花節中興の祖といわれた桃中軒雲右衛門とうちゅうけんくもえもんの公演で、彼の出現以降、浪曲といえば義士伝語りと言われるほど「忠臣蔵」は浪花節の重要な演題となった。また浪花節がレコード化されたことで、日本全国へ急速に広まった。二つ目は、福本日南の『元禄快拳録』（1909年刊）の出版で、これは近代の「忠臣蔵物」の原典とされる。同書の内容は、1908（明治41）年から玄洋社の機関誌『九州日報』で約1年間連載されたものである。

第2次忠臣蔵ブームは、大正末期から昭和初期にかけて起こった<sup>34</sup>。この時期では映画と小説が大きな影響力を發揮する。日本における「忠臣蔵」の映画化は早く、1907（明治40）年である。ただし、これは11代目片岡仁左衛門出演の歌舞伎『仮名手本忠臣蔵』の実写であった。本格的に映画として製作されたのは、牧野省三監督・尾上松之助主演の『実物応用活動写真 忠臣蔵』（1912年）である。大正以降に作られた「忠臣蔵」映画には大作が2つあり、一つは池田富保監督・尾上松之助主演の『実録忠臣蔵』（1926年）、二つ目はマキノ省三監督の『忠魂義烈 実録忠臣蔵』（1928年）である。

またこの時期に、従来の忠君愛国的な「義士」像を批判する新しい小説が生まれた。野上弥生子は『大石良雄』（『中央公論』1926年9月）において、大石に近代人の内面を投影した。また大佛次郎の『赤穂浪士』（上・中・下、1928・29年刊）では、赤穂事件の意味を読み変えて既存の義士像を捉えなおそうとした。この大佛の『赤穂浪士』の人気を受けて、1929（昭和4）年に新国劇で同作品が上演された。新国劇『赤穂浪士』は、中井哲が大石内蔵助を、大河内伝次郎が堀田隼人を演じ大入りとなった。また小説は映画化もされ、志波西果監督・大河内伝次郎主演で『赤穂浪士』（1929年上映）等が製作された。

以上ように、「忠臣蔵」は浪花節のレコード化、連載小説、映画など、新しい再生可能なメディアの登場で全国に普及し、赤穂の町もまた「忠臣蔵」を通して全国に知られるようになる。

### 2-3. 赤穂鉄道と観光化

現代は、映画やテレビドラマなどの娯楽作品が観光に及ぼす効果が知られ、特に大河ドラマが観光産業に与える影響を「大河ドラマ効果」と称する。これは、大河ドラマ放映期間中、題材となった地域で観光客が増加し、著しい経済波及効果があるためだ<sup>35</sup>。大正から昭和初期の赤穂でも、この効果を念頭に置いたような観光戦略が実施されていた。

江戸時代の赤穂の観光に関する記録はほとんどなく、明治になって海水浴客が御崎を訪れたという記録がわずかに存在する<sup>36</sup>。観光地としての問題は、気候は温暖だが観光資源に乏しい点と、町の三方を山に囲まれているため陸路が未発達という点である。こうした状況のもと、町が本格的に観光客誘致を行うのは大正末期から昭和初期の頃である。中心となったのが赤穂鉄道株式会社だった<sup>37</sup>。現在の赤穂観光の基盤は、ほぼこの時期にでき上がったとされる。

赤穂に鉄道が敷設されるまで、物資の輸送は主に廻船であり、廻船問屋と塩田所有者が力を持っていた。しかし明治中期に日本の鉄道網がほぼ整備され、赤穂でも鉄道網による塩の輸送を全国展開することが計画された<sup>38</sup>。こうした要求のもとに敷設された赤穂鉄道は、当初は主要産物の塩を運ぶ軽便鉄道で、赤穂と山陽本線の有年駅をつなぐために1921（大正10）年に創業し、地元では「赤鉄」と呼ばれて親しまれた<sup>39</sup>。

しかし塩中心の限られた貨物量と乗客の伸び悩みで、開業後の数年間は赤字経営だった<sup>40</sup>。そこで鉄道会社が、赤字解消と地元の発展のために、町の観光開発に乗り出したのである。

#### 2-4. 赤穂鉄道による観光PR

当時、観光化の一部として取り込まれたのが、先述の大佛次郎による小説やその映画化といった第2次忠臣蔵ブームだった。赤穂鉄道株式会社発行の観光案内ガイドブックでは、義士史跡を中心に、塩田、御崎の景勝地、坂越生島などを観光拠点としてあげている<sup>41</sup>。

さらに赤穂鉄道は、観光地としての知名度を上げるために、1927（昭和2）年の鉄道省と毎日新聞社の合同企画による「日本新百景」に応募した。これに選ばれると全国的に注目され、観光客の増加が期待できるからである。最終的に「日本新百景海岸の部」3位に選定されたのち、鉄道沿線の名所を紹介する「赤穂鉄道沿線名所案内」などを発行した<sup>42</sup>。またガイドブックでは、名産品として汐見饅頭や赤穂緞通を宣伝した。巻末の後援企業の中にも、緞通工場の名が見られる<sup>43</sup>。

そして新たな観光モデルルートを作り、受け入れ態勢を整えた。赤穂鉄道株式会社は路線バスも営業していたが、団体客へのサービスとして新たに観光バスツアーを企画し、車内で市内の名所・旧跡を案内することにした。このバスツアーは、「赤穂城」「大石神社」「花岳寺」「塩田風景」「大石名残の松」など主に赤穂浪士ゆかりの名所を巡るもので人気を得たという<sup>44</sup>。

さらに夏の海水浴に対して、冬に観光客を呼ぶため義士祭が着目された。赤穂における義士祭の始まりは、1899（明治32）年の義士追慕会である。当時から講師を招いて義士に関する講演会を開催していたが、次第に屋台や余興が増え、年に一度の地元の祭りとなる<sup>45</sup>。

このように赤穂の観光地化が始まると、寺社でも観光客向けに様々な行事を行うようになる。大石神社では、1922（大正11）年から宝くじの販売が恒例行事となり、第二次世界大戦まで続いた。また赤穂鉄道の開通後、「赤穂義士追慕祭」に名称が変更された（1926年）<sup>46</sup>。

赤穂鉄道による「義士祭につき汽車賃半額の広告」（1925年）<sup>47</sup>をみると、義士祭の期間だけ汽車賃半額サービスを行ない、それに伴う観光客の増加によって臨時便を増発していたことがわかる。このような赤穂鉄道による観光PRが功を奏し、義士祭は赤穂の観光資源の一つとして定着した。こうして「夏は御崎の海水浴、冬は義士祭」という観光の目玉ができ、塩業の町

だった赤穂は、新たに「忠臣蔵の町」という観光地として全国に知られるようになった。

以上のように、赤穂緞通業の隆盛は、緞通業の販売促進活動、マスメディアによる娯楽作品の普及、交通網の整備、町の観光化などによって導かれたのである。

### 3. 「赤穂の物語」の表象——犬と松のモチーフ——

#### 3-1. 「利剣文様」の由来

緞通の利剣文様の起源を示す資料は未発見で、起源が中国緞通か中近東の絨毯かは定かでない。しかし先行研究では、直線的な利剣文様はトルコ絨毯の幾何学文様をもとにした、と断定された<sup>48</sup>。断定の理由は、ペルシャ絨毯は曲線的で具象的な文様が多く、トルコ系絨毯は幾何学文様など直線的・抽象的な文様(図10)が多いため、と考えられる<sup>49</sup>。



図10. トルコ絨毯の植物文様

『赤穂市史』第6巻(1984)によると、赤穂緞通は中国の「万歴氈」が元だとされるが、中国緞通だけでなく中近東の絨毯も文様の手本にしていた可能性がある。1900(明治33)年の農商務省編『工芸品意匠之沿革』は、輸出意匠における海外実地調査の結果報告であるが、このなかに関連する記述が残されている。同書では国内で流通していたペルシャ・トルコ絨毯について、中国経由で輸入したものを万歴氈・オランダ経由で輸入したものを天鷲絨氈と名付けていたが、外国との交通が盛んになってから生産地が判明したとある<sup>50</sup>。この『工芸品意匠之沿革』の記述から判断すれば、初期の赤穂緞通は中国緞通だけでなく中近東の絨毯も手本にしていた可能性が高くなる。

ただし、トルコ絨毯の幾何学文様が利剣文様の元だと仮定するとしても、図2の文様を「利剣」と名付けた理由が不明である<sup>51</sup>。

利剣とは固有名詞であり、「不動明王などの手に持つ降魔の剣」<sup>52</sup>を指す。不動明王の起源はインドの尊格「Acala-natha」<sup>アチャラ ナータ</sup>で、仏教文献への初出は『不空罽索神変真言経』(709年)第9巻だとされる。この不動明王像(図11)は、10世紀頃に19種類の図像的特徴がすでに確立していた。特徴の中に「左手に罽索を持ち」「右手に利剣をとる」とある。この右手の利剣(別名「俱利伽羅剣」)は、古代の諸刃の太刀として表され、不動明王の象徴とみなされる<sup>53</sup>。



図11. 不動明王像



図12. 剣紋

しかし管見の限り、「利剣」という文様名はなく、不動明王の利剣のような太刀を文様化し

た場合、「剣」(図12)と名付けられる。この「剣」文様は、平安・鎌倉期以降に発達した片刃の日本刀のような実用兵器ではないが、家紋に剣を用いるのは武家の精神からだとされる<sup>54</sup>。

つまり、日本でなじみの薄いトルコの幾何学文様が、すでに存在していた諸刃の太刀に見立てられ、さらに固有名詞「利剣」へ結びついた、というように文様の読み替えがあったと推察できるのである。

### 3-2. 「犬と松」のモチーフ

犬利剣文様の特徴である「犬と松」文様は、2つのデザイン(利剣文様と土耳其文様)に組み込まれた。調査の結果、「犬」部分は大石神社に、「松」部分は花岳寺に由来すると考えられる。両方とも「忠臣蔵」ゆかりの寺社で、地元の祭りである義士祭を主催した観光名所である。

#### (1) 「犬」と大石神社

大石神社は1912(大正元)年に赤穂浪士たちを祀る神社として建立された。義士祭では、祭りのハイライトである義士行列を行う前に大石神社と花岳寺に参拝することが恒例だった<sup>55</sup>。

この大石神社建立の背景には、明治政府による神道国教化政策が関わる。1871(明治4)年、神社を「国家の宗祀」とする布告と「官社以下定額・神官職制度規則」が交付され、これ以降、中央集権的な神社制度が成立した。この神道国教化政策のもと、神話の神々・皇統・国家の功臣を神として祀るという目的で、神仏分離や廃仏毀釈の諸布告が発せられたのである<sup>56</sup>。

功臣を神として祀るという思想は幕末から存在し、1868(明治元)年以降、神社の創設が相次いでいる<sup>57</sup>。大石内蔵助以下四十七士を祀る大石神社も、この流れの中のひとつに数えることができる。こうした社会状況のもと、1883(明治16)年に花岳寺の仙珪和尚を中心とした有志によって「大石神社創設之儀願」が出されるが、経済恐慌や日露戦争のため、計画は中断する。日露戦争以降は神社建立のための募金が順調に集まり、1911(明治44)年に大石神社本殿建設に着手、そして1912(大正元)年に遷座祭が執行された<sup>58</sup>。

この大石神社の狛犬と、「犬と松」文様の「犬」部分に、図像的相似点が見受けられる。まず、「犬」部分は必ず2匹1対の坐像となっている(図13)。これは通常の獅子文様(図14)にはない条件である。獅子は、日本では中国の架空の動物として受容され、唐獅子と呼ばれた。室町時代以後は牡丹と組み合わせられた唐獅子牡丹文様が多い。一方、狛犬を文様にする場合は、獅子を2匹並べて1対の構図にする場合が多く見られる<sup>59</sup>。ここでの「狛犬」とは狭義の狛犬ではなく、広い意味で神社などに置かれる2匹1対の獅子・狛犬、という



図13. 「犬」部分



図14. 獅子文様

意味で用いている。

広義の狛犬（高麗犬の意）は「神社の社頭や社殿の前に据え置かれる一対の獅子に似た獣の像。中国文化の影響によって生じ、魔よけのためといい、昔は宮中の門扉・几帳・屏風などの動揺するのをとめるためにも用いた」<sup>60</sup>とあり、2匹で1対とされている。獅子・狛犬を2匹1対とする組み合わせが固定化したきっかけは、宮中紫宸殿の賢聖障子に描かれた図である。図柄は獅子・狛犬が向き合って座り、獅子は開口、狛犬は閉口し、後者の頭上に角がある。9世紀頃以降、この形式が基準となり、現在まで受け継がれている。名称も近世以後は獅子・狛犬1対を「狛犬」の名で総称するようになった<sup>61</sup>。

大石神社の狛犬（図15）に注目すると、赤穂市内のほかの狛犬にはない特色があった<sup>62</sup>。これは日本で最も古い石造りの狛犬とされる、奈良の東大寺南大門の獅子（図16）をモデルに造られていた。現在東大寺南大門に安置される石造獅子は、『東大寺



図15. 大石神社の狛犬



図16. 東大寺南大門の狛犬

造立供養記』によると大仏殿の石造脇侍・四天王像とともに1196（建久7）年に宋の職人によって造立された。宋代の獅子像は造立当時の一般的なデザインではなく、珍しいものだった。この南大門の獅子像は、東西ともに阿形で坐像、両方とも胸を強く張り頸を伸ばして遠吠えする様子をあらわし、2条のあごひげが生え、葉形のようらく瓔珞の付く胸飾りを付けている<sup>63</sup>。このような宋風の狛犬は、全国的にも大阪の住吉大社、京都の清水寺、新潟の弥彦神社などにしかなく<sup>64</sup>、大石神社建立当時の人々の目にも赤穂近辺にある他の神社の狛犬との違いは明らかだったといえる。

以上より、「犬と松」文様の「犬」部分は、東西同形の狛犬・胸を強く張った坐像という図像的特徴から、大石神社の狛犬の要素を持っているといえる。

## (2) 「松」と花岳寺

『播州赤穂 台雲山花岳寺』（花岳寺，1999）によると、花岳寺は1645（正保2）年に建立された浅野家の菩提寺で、赤穂浪士の墓所もかねている。寺の境内には大石内蔵助が植えたと言われる2本の松「大石なごりの松」があり、町の観光化が始まった時期に観光名所となっていた。2本の「大石なごりの松」は1927（昭和2）年に枯れ、その後2代目が移植された。

この花岳寺の初代「大石なごりの松」と、「犬と松」文様の「松」部分に、図像的相似点が見受けられる。「松」部分は、2本の幹が途中で一緒になっている（図17）。この特徴は、通常の松を2本並べて文様化した場合、各株を独立して描く<sup>65</sup>ことに対して異色である（図18）。

2本の松の幹が途中で一緒になる図様としては「相生の松」があり、兵庫県高砂神社境内に

ある赤松と黒松が自然に合着した「高砂の松」などが有名である<sup>66</sup>。相生の松の場合、図像的には「ひとつの根元から2本の幹が出たもの」であり、夫婦の契りの深さを象徴する<sup>67</sup>。一方で「犬と松」文様の「松」部分は、2本の根と幹を独立させて描いている点において、相生の松とは異なる。この2本の根と幹を独立させた形態は、



図17. 「松」部



図18. 並び松紋

花岳寺の初代「大石なごりの松」（図19）に一致する。初代「大石なごりの松」の由来を示す資料「そうじゆこうがい雙樹梗概」によると、2本の松は「東松」と「西松」という独立した株であり、また「双樹が相對して、生い茂った枝が庭



図19. 初代「大石なごりの松」

を蓋のように覆っていた」とある。「双」も「対」も2つで1組のものを指す場合に用いられることから、初代の松は、2本で1組と考えられていたことが明らかになった。また花岳寺の境内にある千手堂に初代「大石なごりの松」の写真が飾られてあるが、この写真からもお互いの枝が重なり合っている為、遠目には1本の松に見えることがうかがえる。以上より、「松」の部分が花岳寺の初代「大石なごりの松」の要素を持っているといえる。

また大石神社と花岳寺という異なる場所のモチーフを「犬と松」文様という一つの意匠にしている点、「忠臣蔵」と通称された利剣文様に「犬と松」文様が組み込まれている点から、この「松」が単に赤穂の松林をデザインしたのではなく神格化された松だといえる。つまり、大石内蔵助が植えた2本の松を狛犬の間に配置することによって、神社の祭神である大石本人さいじんを現しているのである。これらから、「犬と松」の文様は、大石神社の狛犬と花岳寺の初代大石なごりの松であると解釈できる。

## 結 論

以上の考察から、犬利剣文様が大正から昭和初期という短い時期に作られた意味を以下のように結論づけることができる。

この時期、赤穂緞通では文様の独自性が確立し、鍋島緞通の商標に頼る販売から脱却しようとしていた。また当時は、「忠臣蔵」という物語を媒介とした観光化を町全体で行っていた。この際に他の観光地との差異化が課題となり、赤穂緞通にも地域色が求められていた。

したがって犬利剣文様が製作された背景には、緞通業による販売戦略だけでなく、赤穂という町が行った「物語」を媒介とした観光化と、その際に既存のモチーフを読み替えながら土地のアイコンを創出していく意識が存在したのである。つまり犬利剣文様の「犬と松」の文様は、「忠臣蔵」と密接に関わる寺社の要素をモチーフにすることで、「赤穂の町の物語」を凝縮して

表しているのである。

なお、「犬と松」の文様についての文字資料が未発見の現在、土地のイメージを象徴によって読み込むイコノロジー研究は、文様形成の社会的意味を明らかにする重要な方法となる。赤穂緞通のように工芸と工業の間に位置づけられる産業の場合、製品に銘を入れ、製作者の名を残すものではなかったため、デザインの意図を明確にする文字資料の特定は困難である。また当時の購買者にとっては、職人の名前ではなく工房や産地が重要であった。

以上のように、「犬利剣」という特定の時代と産地に限定された文様を、当該社会の既存の表象（イメージと物語）の引用と反復と捉えることにより、赤穂という土地が観光によって顕在化するための視覚的欲望の表れと位置づけることができる。

#### 注

- 1 図録『絨毯 — シルクロードの華 —』朝日新聞社（1994）p.8, p.160
- 2 宮原香苗「鍋島緞通 — 近世肥前の木綿織り敷物について —」『De Arte／九州藝術学会』9号（1993）pp.62-67
- 3 『赤穂市史』第3巻 赤穂市（1985）pp.364-366
- 4 図録『世紀の祭典 万国博覧会の美術 パリ・ウィーン・シカゴ万博に見る東西の名品』NHK, 日本経済新聞社他（2004）pp.10-11
- 5 東京国立博物館『明治デザインの誕生 — 調査研究報告書『温知図録』 —』国書刊行会（1997）pp.122-128
- 6 企画展図録『赤穂緞通Ⅱ』赤穂市立美術工芸館田淵記念館（2005）p.97
- 7 角山幸洋『堺緞通 — 中国緞通技術の受容と輸出地場産業の成立 —』関西大学出版部（1992）pp.14-17, pp.73-76, p.110
- 8 宮原前掲書（1993）p.74
- 9 角山前掲書（1992）p.168
- 10 赤穂市前掲書（1985）pp.364-365
- 11 高村直助『近代日本綿業と中国』東京大学出版会（1982）p.242
- 12 赤穂民俗研究会『赤穂の民俗 その5 — 御崎編 —』赤穂市教育委員会（1986）pp.74-75
- 13 赤穂市前掲書（1985）p.695
- 14 赤穂市立美術工芸館田淵記念館前掲書（2005）p.58
- 15 赤穂市立美術工芸館田淵記念館前掲書（2005）p.87
- 16 宮原前掲書（1993）p.74
- 17 仲買店で「鍋島緞通」として販売されていたという点については、赤穂市立歴史博物館学芸員の木曾こころ氏にご教示いただいた。
- 18 宮原前掲書（1993）p.74
- 19 宮原前掲書（1993）p.70

- 20 赤穂市立美術工芸館田淵記念館前掲書（2005） p. 8
- 21 企画展図録『赤穂緞通』赤穂市立美術工芸館田淵記念館（2003） p. 11
- 22 利剣文様と「犬利剣」文様の通称が「忠臣蔵」であったという点については、赤穂市立歴史博物館学芸員の木曾こころ氏にご教示いただいた。
- 23 赤穂市立美術工芸館田淵記念館前掲書（2003） p. 11
- 24 岩崎雅美「緞通について」『産業技術史研究』産業技術史研究会編 大阪府企画部（1984） p. 10
- 25 『鍋島緞通 — もめんの華 —』佐賀県立美術館（1992）、企画展図録『赤穂緞通』赤穂市立美術工芸館田淵記念館（2003）、企画展図録『赤穂緞通Ⅱ』赤穂市立美術工芸館田淵記念館（2005）
- 26 赤穂民俗研究会前掲書（1986） p. 74
- 27 赤穂市立美術工芸館田淵記念館前掲書（2003） p. 57
- 28 これらは赤穂で名付けられた商品名であるため「」で表記している。
- 29 赤穂市立美術工芸館田淵記念館前掲書（2005） pp. 82-84
- 30 パンフレット「赤穂緞通の栞」赤穂緞通製作所
- 31 赤穂市立美術工芸館田淵記念館前掲書（2005） p. 33
- 32 図録『御料車 — 知られざる美術品』鉄道博物館（2010） p. 29
- 33 宮澤誠一『近代日本と「忠臣蔵」幻想』青木書店（2001）、松島栄一『忠臣蔵』岩波書店（1964）
- 34 宮澤前掲書（2001） pp. 143-153
- 35 日本政策投資銀行北陸支店「大河ドラマを活かした観光活性化策～持続的な観光需要の創出に向けて」（2000） pp. 8-23
- 36 赤穂市前掲書（1985） p. 680
- 37 赤穂民俗研究会『赤穂の民俗 その7 — 加里屋・上仮屋編 —』赤穂市教育委員会（1988） p. 53-55, p. 62
- 38 安保彰夫『赤穂鉄道の発掘』ネコ・パブリッシング（2004） pp. 2-3
- 39 曲直部健朗・谷口秀雄『ひょうご懐かしの鉄道 廃線ノスタルジー』神戸新聞総合出版センター（2005） pp. 146-147
- 40 赤穂市教育委員会前掲書（1988） p. 55
- 41 『赤穂鐵道案内』赤穂鐵道株式会社（1921）
- 42 赤穂市教育委員会前掲書（1988） p. 55
- 43 赤穂鐵道株式会社前掲書（1921）
- 44 赤穂市教育委員会前掲書（1988） p. 60
- 45 飯尾精『大石神社創建の由来と歴史』赤穂大石神社（2002） pp. 62-65
- 46 飯尾前掲書（2002） p. 64
- 47 特別展図録『赤穂鐵道 — 塩を運んだ軽便鐵道 —』赤穂市立歴史博物館（1990） p. 40
- 48 赤穂市教育委員会前掲書（1986） p. 78
- 49 朝日新聞社前掲書（1994） p. 66
- 50 角山前掲書（1992） pp. 96-97
- 51 赤穂市立美術工芸館田淵記念館前掲書（2005） p. 8

- 52 『広辞苑』第2版 岩波書店 (1971)
- 53 頼富本宏『庶民のほとけ — 観音・地藏・不動』日本放送出版協会 (1984) pp.160-189
- 54 丹羽基二『家紋大図鑑』秋田書店 (1982) p.280
- 55 赤穂市教育委員会前掲書 (1988) p.96
- 56 安丸良男『神々の明治維新 — 神仏分離と廃仏毀釈 —』岩波書店 (1979) pp.4-8, pp131-132, pp.124-125
- 57 安丸前掲書 (1979) pp.60-64
- 58 赤穂市前掲書 (1985) pp.294-300
- 59 岡登貞治『文様の事典』東京堂出版 (1991) p.52, p.80, p.125, pp.142-144, p.150
- 60 『広辞苑』前掲書 (1971)
- 61 『日本の美術 第279号 狛犬』至文堂 (1989) pp.44-47
- 62 赤穂市文化財保護連絡委員会『赤穂の鳥居と狛犬』赤穂市教育委員会生涯学習課 (1998)
- 63 至文堂前掲書 (1989) p.74
- 64 上杉千郷『狛犬事典』戎光祥出版 (2002) p.207
- 65 丹羽前掲書 (1982) pp.550-556
- 66 『広辞苑』前掲書 (1971)
- 67 『広辞苑』前掲書 (1971)

#### 図版出典

- 図1 図録『絨毯 — シルクロードの華 —』朝日新聞社 (1994) より、筆者が作成した。
- 図2 企画展図録『赤穂緞通』赤穂市立美術工芸館田淵記念館 (2003) : 筆者が便宜上加工した。
- 図3 赤穂市立美術工芸館田淵記念館前掲書 (2003)
- 図4, 図13 赤穂市立美術工芸館田淵記念館前掲書 (2003), 企画展図録『赤穂緞通II』赤穂市立美術工芸館田淵記念館 (2005) : 筆者が便宜上加工した。
- 図5, 図7, 図8 赤穂市立美術工芸館田淵記念館前掲書 (2005)
- 図6 『名宝日本の美術 第4巻 正倉院』小学館 (1982)
- 図9 図録『御料車 — 知られざる美術品』鉄道博物館 (2010)
- 図10 朝日新聞社前掲書 (1994)
- 図11 図録『明王展 — 怒りと慈しみの仏 —』奈良国立博物館 (2000)
- 図12, 図18 丹羽基二『家紋大図鑑』秋田書店 (1982)
- 図14 早坂優子『日本・中国の文様事典』視覚デザイン研究所 (2000)
- 図15 筆者撮影
- 図16 『日本の美術 第279号 狛犬』至文堂 (1989)
- 図17 赤穂市立美術工芸館田淵記念館前掲書 (2005) : 筆者が便宜上加工した。
- 図19 筆者が撮影し、便宜上加工した。